

「王状元」と福建：南宋文人王十朋と『王状元集百家注東坡先生詩』の注釈者たち

甲斐, 雄一
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/13196>

出版情報：中国文学論集. 37, pp.61-75, 2008-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



「王状元」と福建

——南宋文人王十朋と『王状元集百家注东坡先生詩』の注釈者たち——

甲 斐 雄 一

一 南宋刊本と冠辞

唐宋五代にその起源が求められる図書出版は、官刻を中心とした北宋期を経て、南宋期に隆盛を迎えた。宋代における図書出版の発展・拡大を示す現象として、浙江・四川・福建の各地域で展開された地方出版を挙げることができる。とりわけ福建建陽本は、「麻沙本」の代名詞で呼ばれ、劣悪な品質であるとされた坊刻本で知られる。

南宋初期から中期に亘って、この福建建陽で刊行される書物は、他本との差異化を図ったと思しき、長大な書名が特徴の一つとされる。『監本纂図重言重意互注点校毛詩』、『新刊五百家注音辨昌黎先生文集』といった書名には、「監本」「纂図」「新刊」などの冠辞によって、「どのような特長を有するか」が示され、また「重言」「重意」「五百家注」「音辨」の冠辞によって、「どのような注釈を附するか」が列挙され、誇示される。

内容の特徴、注釈の豊富さの他に、書名に冠されるのが「誰が編集したのか」、その書物の編集者名である。『東萊先生增入正義音注史記詳節』、『陸状元集百家注資治通鑑詳節』など、これら書名の冠辞に用いられる編集者名には、金文京氏に既に指摘があるように、「状元」、科挙の主席合格者であることを示すものがみられる。

本稿で扱う「王状元」こと王十朋（一一一七—一一七二、字龜齡、号梅溪、温州乐清人）は、紹興二十七年（一一五七）の科挙で状元登第を果たした真正正銘の状元であり、南宋中期に刊行された杜甫詩集（『王状元集百家注編年杜陵詩史』）、蘇軾詩集、また『宋王状元標目集注唐文類』（季振宜『季滄葦書目』古文選）、『王状元八詩六帖』（『永樂大典』卷八四九〇八五二）

「王状元」と福建

の編集者として著録された人物である。王十朋が実際に編集を行ったかという問題については、依然として議論の余地が有るが、その真偽を問わず、「王状元」の名に何らかの付加価値が期待できたからこそ、書名に冠せられるに至ったのであろう。その背景には、王十朋への同時代的な評価の高さを想定することができる。では、いかなる評価の下に、いかなる付加価値が期待されたのか。本稿では、「王状元」という冠辞が持つ意義と価値について考察する。また、「王状元」という冠辞を通して、こつした冠辞が本当に営利出版における喧伝のために用いられたものであるのか、南宋刊本の冠辞の背景にあるものについても考えてみたい。

具体的には蘇軾詩集、『王状元集百家注東坡先生詩』(以下、「王状元本」と略称)の注釈者百名(実際には九十六名)を考察の対象とする。該書の注釈者には、王十朋との交友関係が確められ、その交友関係から、同時代的な王十朋評価、王十朋像の再検証が可能であること、またその初期の版本が建陽版であり、さらに該書の注釈者が後に杜詩の注釈者としても名が挙がっている(分門集注杜工部詩)ことから、同時代的な王十朋評価を、特に福建という地域と関連付けて考察できるからである。

二 百名の注釈者について——王文誥の分類を手がかりに——

清人王文誥(一七六四?、浙江仁和人、字純生、号見大)の手による『蘇文忠公詩編注集成』は、馮心榴(一七四〇—一八〇〇、浙江桐鄉人、字星美)『蘇文忠詩合注』を踏まえて編集されたもので、とりわけ、その「総案」は蘇軾の伝記に対する詳細な考察として高く評価されているが、また、「凡例」において王状元本の注釈者百家に対して分類を試み、「王注姓氏」において注釈者の出自来歴について考察を加えている点でも、注目に値する。換言すれば、注釈を施したとされる百家が、作者蘇軾と、そして編集者(と目される)王十朋といかなる関係を有するのかという問題について、初めて光を当てたのが王文誥なのである。王状元本が南宋期に編集・刊行された書物である以上、編集者として標榜される南宋人、王十朋という人物についても考察されるべきであろう。王十朋と注釈者が交友関係にあることを指摘するために、王十朋の別集『梅溪集』、つまり王十朋の詩文を史料として活用した王文誥の分析は、

「王状元」の意義を考える上で極めて重要なものである。

王文誥は、注釈者百家を七類に分ける。

- (A) 「門牆之列」(蘇軾門下)
- (B) 「由魯直而溯祖」(黃庭堅門下)
- (C) 「鼓旗相角」(先行注釈書の注釈者)
- (D) 「北宋有声」(北宋期の著名人)
- (E) 「南渡登朝、多有忤賊檜而致禍者」(南宋初期、秦檜と対立した人物)
- (F) 「起永嘉、因王一振」(王十朋の周辺人物)
- (G) 「南渡理學閩支大宗」(朱子學關係者)

このうち(A)「門牆之列」(蘇軾門下)と(B)「由魯直而溯祖」(黃庭堅門下)には蘇軾・黃庭堅に連なる人物が配されており、また(C)「鼓旗相角」(先行注釈書の注釈者)に分類されるのは、先行する十注本の注釈者である。蘇軾の近親・門弟たちと、先行注釈書の注釈者が百家に入ってくることは、無理なく理解できよう。次の(D)「北宋有声」(北宋期の著名人)に挙げられる人物が、江西詩派と関わりの深い人物であり、(B)のグループに近いことについては、既に李貞慧氏の指摘がある。残る(E)「南渡登朝、多有忤賊檜而致禍者」(南宋初期、秦檜と対立した人物)、(F)「起永嘉、因王一振」(王十朋の周辺人物)、(G)「南渡理學閩支大宗」(朱子學關係者)の三グループは、南宋期の人物が該当する。王十朋との交友者として分類されるのは(F)「起永嘉、因王一振」であるが、結論から言えば、(E)、(G)のグループについても、やはり王十朋との関係に着目すべきであり、王状元本の注釈者として挙名される南宋人は、総じて王十朋との関係において把握することが可能である。つまり、(E)・(G)のグループすべてが、同時代の王十朋評価を考察する対象となり得るのである。

王文誥の分類について附言しておかねばならないのは、王文誥が名を挙げている注釈者は百家のうち六十家ほどであり、すべてを分類しているわけではないことである。注釈者の某が、どのグループに属するかを判定する作業は、建設的ではない上に、複数のグループに跨って所屬すると判断される注釈者も少なくない。本稿ではあくまで

王文誥が分類したグループの特徴・特質を用いて、その王十朋との関連性を交友関係から考察するものであって、注釈者百家すべての分類を目的とするものではないことをあらかじめ断つておきたい。⁵⁾

三 王十朋と反秦檜勢力

以下、王文誥の分類に従って、王十朋と王状元本の注釈者の関係について見ていく。

まず、(E)「南渡登朝、多有忤賊檜而致禍者」(南宋初期、秦檜と対立した人物)は、南宋初期に専権を振るつた秦檜⁶⁾(一〇九〇—一一五五)と対立した人物が配されるグループである。ここでは吳芾、汪洵(以下、王状元本注釈者は「チックで示す)の二人を挙例する。

吳芾(字明可、台州仙居人)は、紹興二二(一一三二)年の進士で、秦檜と旧知であつたが、彼が専権を握ると距離を置くようになり、ついには秦檜に怪しまれて弾劾されるに至つた。

吳芾、字明可、台州仙居人。舉進士第、遷祕書正字。與秦檜舊故、至是檜已專政、芾退然如未嘗識。公坐旅進、揖而退、檜疑之、風言者論罷。

吳芾、字は明可、台州仙居の人なり。進士の第に挙げられ、祕書正字に遷る。秦檜と旧故なるも、是に至りて檜已に政を専らにす、芾退然として未だ嘗て識らざるが如し。公坐に旅進せば、揖して退く、檜之を疑ひ、風言の者は罷むるを論ず。

(宋史⁷⁾ 卷三百八十七、吳芾伝)

汪洵(字養源、信州人)は、王十朋の墓誌銘(「宋龍圖閣字士王公墓誌銘」)を撰した汪応辰の兄であるが、秦檜の兄・秦梓からの推薦の誘いを断つた経歴を持つ。

「紹興正論」汪洵、字養源、尉宣城。秩垂滿、闕令職狀一紙。知州秦梓意、其必求即薦之。洵終不屈、或問、「何不從内翰求文字陞陟。」曰、「若爲所薦、則終身爲秦客矣。洵不辭再爲判司一任。」

「紹興正論」にいふ、汪洵、字は養源、宣城に尉たり。秩滿するに垂とし、令を闕く職狀一紙あり。知州秦梓意ふに、其れ必ず求むれば即ち之を薦めんと。洵終に屈せず、或問ふ、「何ぞ内翰に従ひて文字の陞陟するを求めんや」と。曰く、「若し薦むる所為

れば、則ち終身秦客為らん。涓再び判司の一任為るを辞せず」と。

(「翰苑新書」前集卷五十九「不為秦客」)

以上のように、王状元本注釈者には、秦檜に与しなかつたことを経歴として持つ人物の存在が確認できる。それでは、これらの人物は、王十朋とどのように結びつき、「王状元」にどのような価値をもたらしめているのだろうか。王文誥が(E)の分類に挙名している人物で言えば、馮方(字貞仲)は、秦檜専制崩壊の後、太学生に、王十朋と共に「五賢」と称されている⁷⁾。また、張孝祥(一一三二—一一六九、字安国、歷陽烏江人)は、王十朋と共に、秦檜専制崩壊後に復権した張浚(一〇九七—一一六四)政権下で拔擢されており、両者は乾道元年(一一六五)に饒州(江西省鄱陽)にて詩歌の応酬をしている。そもそも、王十朋の状元登第(紹興二十七年(一一五七))こそは、秦檜死後初めての科挙における、秦檜専制への反動と革新という政治情勢の象徴であり、「王状元」は(E)のグループと強い関連を有しているのである。反秦檜勢力の象徴的存在、これこそ「王状元」に込められた同時代評価の一つであると考えられる。

四 王十朋と故郷・温州

(F)「起永嘉、因王二振(王十朋の周辺人物)は、王十朋の出身・浙江温州において王十朋との交友関係を持つグループである。同郷という地域的要因に強く依存しているため、彼らの事跡は史料に乏しく、ために『梅溪集』に収める王十朋の詩文が重要な手がかりとなる。なかでも、王十朋が開いた梅溪書院の門人の名前を詠み込んだ「梅溪題名賦」(全集 文集卷六)には、王状元本注釈者の六人の名が確認できる。

陳元佐、字希仲……敢不希仲舒¹⁰⁾之明經(敢て仲舒の明経なるを希はず)「

萬庚、字先之……先之以孝忱之意(之に先んずるに孝忱の意を以てす)「

萬庠、字申之……申之以敦信之誠(之に申すに敦信の誠を以てす)「

萬椿、字大年……「如椿之靈(椿の靈なるが如し)「

吳翼、字季南……「如翼斯飛(翼の如く斯れ飛ぶ)「

朱少雲、字吉作……吾徒之秀、乃有詞賦令、少雲之作(吾が徒の秀なる、乃ち詞賦有らば、少雲の作なり)「

「王状元」と福建

梅溪書院については、「梅溪題名賦」冒頭の自注に詳しい。

自淵獻而遠乎敦牂兮 頃十朋而今百朋 淵獻自り敦牂に遠ぶ 頃十朋にして今百朋たり

〔自注〕 予癸亥秋關館聚徒、游從者十人、至庚午歲、通數之、凡一百一十二人。

予 癸亥の秋に館を關き徒を聚む、游從する者十人、庚午の歲に至りて、通して之を數ふれば、凡そ一百一十二人たり。

癸亥（紹興十三年「一一四三」、淵獻は亥年をいう）から庚午（紹興二十年「一一五〇」、敦牂は午年をいう）までの足かけ八年、梅溪書院の門をくぐった者は百一十二人にもなるといふ。すなわち、王十朋は三十代の壮年期を家塾の教師として過ごしており、この時期は進士登第以前の下積み時期だったようである。

相勉惟清白 囊如四壁空 相勉めて清白を惟ひ 囊は四壁の空しきが如し

難忘將絶語 勸我莫言窮 忘れ難し 將に絶えんとするの語 我に勸む 窮を言ふ莫れ

〔自注〕 予一日忽ち窮を言ふ、令人曰、「君今勝作書會時矣、不必言窮。」予悅其言、蓋死之前數日也。

予一日忽ち窮を言ふ、令人曰く、「君今書會を作す時に勝れり、必しも窮を言はず。」予其の言を悦ぶ、蓋し死の前數日なり。

〔悼亡〕詩、全集、詩集卷二十六

乾道四年（一一六八）知泉州事在任中、王十朋は妻の賈氏に先立たれてしまふ。「悼亡」詩において、困窮する王十朋に対し、妻は、「塾の先生をしていた頃よりは良いでしょう」と言つて励ます。数日後、賈氏は他界してしまふが、その言葉は王十朋の耳から離れない。

ここで注意すべきは、困窮する王十朋を励ます言辭の中で、家塾教師時代が困窮の度合の比較対照として挙げられている点である。先に、秦檜死後に生じた氣運に乗って華々しく状元登第を果たした王十朋像を見てきたが、ここでは逆に、決して有望とは言えない環境から、苦難を乗り越え登第した王十朋像を看取ることが可能である。汪應辰が撰した王十朋の墓誌銘を見ても、樂清王氏が決して名族ではなかつたことが判る。

公諱十朋、字龜齡、姓王氏、温州樂清人。曾祖信、祖格、父輔父、以公貴贈左朝散郎、母萬氏贈碩人。其先自錢塘徙、至朝散公始業儒、有聲。

公諱は十朋、字は龜齡、姓は王氏、温州樂清の人なり。曾祖信、祖格、父輔父、公の貴きを以て左朝散郎を贈られ、母萬氏碩人を贈

らる。其の先錢塘自り従る、朝散公に至りて始めて儒を業とし、声有り。

(汪応辰「宋龍圖閣學士王公墓誌銘」、「文定集」卷二十三)

ここには王氏が朝散公、父親の代から學問に取り組み始めたことが記されている。王氏は代々進士を輩出するような家柄ではなかったが、そこから下積みの時代を経て状元登第の榮譽を勝ち取った人物、「王状元」は科擧が本来約束すべきサクセスストーリーの体現者という意義も有していた。

こうした成功者に要求されるのが、同郷人を推薦し引き立てる活動、中央とのパイプ役である。梅溪書院の門弟であった萬庚(字先之)は、太学上舎の上位卒業をもって官界にあつたが、榮達の途にはなかった。そこで王十朋は、赴任先の泉州から、時の宰相、虞允文に萬庚を推薦する。

虞允文人相、王十朋自泉州貽書薦之、謂「庚爲上舎第一、今太学上游多在館閣、而獨庚汨沒、乞加識擢以奨恬退。」虞得書、議除學官、未上卒。

虞允文相に入る、王十朋泉州自り書を貽りて之を薦め、謂く「庚上舎の第一爲り、今太学の上游館閣に在る多し、独り庚汨沒す、乞ふ識擢を加へて以て恬退を奨めんことを」と。虞書を得、學官に除するを議せんとするに、未だ上らずして卒す。

(「兩浙名賢錄」卷四十六「洪州録參萬先之庚」)

残念ながら、推薦が虞允文に容れられる前に、萬庚は死去してしまつた。

太學時名重 吾郷徳譽崇 太学の時名重く 吾が郷に徳譽崇し

才華蓋天祿 官職止儒宮 才華は天祿を蓋ひ 官職は儒宮に止む

相國方知愈 諸公競薦雄 相國方に愈を知り 諸公競ひて雄を薦む

天涯忽聞訃 老淚灑西風 天涯忽ち訃を聞き 老淚 西風に灑ぐ (「哭萬先之」全集、詩集卷二十八)

王十朋の推薦文は『梅溪集』には伝わらないが、萬庚の才を韓愈・揚雄に譬えてその死を哭す詩が収録されており、『兩浙名賢錄』の記述と合致する。

こうした推薦活動から鑑みるに、地元から出現した状元という存在は、単に憧憬や賞賛の対象であつただけでなく、中央との繋がりを有し、実利をもたらしてくれる存在であつたことが判る。温州人にとつての「王状元」とは、

「王状元」と福建

科挙での成功を体現した人物であるばかりでなく、温州と中央とのパイプ役をも期待される人物であつたのである。

五 泉州赴任期における王十朋と注釈者の交流

ここまで、王文誥の分類に従つて、王十朋と王狀元本注釈者との關係をみてきたが、交友關係について、更に考慮すべきことがある。それは、彼らとの交流の時期である。時期に着目してみると、王十朋と注釈者の關係は、王十朋の知泉州事赴任期（乾道四六年一二六八―七〇二）の交友關係にまで及んでいる。乾道七年には王十朋が死去しているので、まさしく最晩年の交友關係である。本節では、王十朋の福建泉州への赴任時期の交友關係を整理することから、(G)「南渡理學閩支大宗」（朱子學關係者）、王十朋と朱子學者との關係を考へる手がかりとしたい。

王十朋は知泉州事として赴任しており、この時期の交友は公人としての性格が強く、公務の延長線上にあつたと考えられる。**陳知柔**（字体仁、泉州永春人）に和した詩では、「共に朝廷へ帰つて恵みの雨を祝賀しよう、我々の忠言は主君の知るところとなるであろう」と詠う。

相將歸賀天朝雨

定有忠言結主知

相將ひきみて歸り賀さん天朝の雨

定めて有るべし 忠言主の知るを結ぶを

（王十朋「夏四月不雨、守臣不職之罪也。將有請於神、雨忽大作、陳賀州有詩贊喜、次韻以酬、全集」卷二十六）

同様に、**蔣雛**（字元肅、興化軍仙遊人）に贈つた詩も降雨を喜ぶものであるが、「蔣先生は書齋におられながら、憂国の思ひは太守を奉じる私と何ら変わらない」と言い、公務を強く意識した交流が展開されている。

廣文先生坐絳帳

憂國心與黃堂同

広文先生絳帳に坐すも

憂国の心は黄堂と同じくす

（王十朋「次韻蔣教授喜雨、全集」詩集卷二十六）

また、王十朋が知泉州期に携わつた公務の一つとして、貢院、解試の試験場の建築（修築あるいは増築か）がある。この指揮を執つたのが、**陳孔光**（字德溥、福州長樂人）と**葉飛卿**（未詳、官は県丞）という注釈者である。

節推陳德溥貢院之役、既成、畫圖見示、因作是詩。

節推陳德溥 貢院の役を董す、既に成り、画図もて示さる、因りて是の詩を作る。

（「貢院圖」題注、『全集』詩集卷二十七）

千間廣廈能宣力 何止區區不負丞 千間の広廈 能く力を宣ふ 何ぞ区区として丞を負ふに止まらん

〔自注〕 貢院之役、飛卿與陳節推董之。

貢院の役、飛卿と陳節推之を董す。

〔得葉飛卿書因寄貢院碑〕、『全集』詩集卷二十九

王十朋はこの貢院に多数の桂の木を植え、万桂堂と名付けた〔万桂堂〕詩及び「臨行至貢院觀桂 贈致約」詩、『全集』詩集卷二十九。彼の知泉州事赴任期の大きな業績の一つと言えよう。

このように、泉州での注釈者との交友関係は、公務に基づいて構築されている。では、泉州赴任が「王状元」の評価形成に与えた意義とはいかなるものであつたのだろうか。

六 朱熹による王十朋評価とその継承

小島毅氏は、泉州を中心とした福建南部において、最初期の朱子学普及がなされた過程について考察しているが、王十朋に対する泉州赴任期の評価の重要性もまた、朱子学の継承と関係する。すなわち、朱熹（一一三〇～一二〇〇）自身が王十朋に対して、高い評価を与えており、その後、朱熹による評価を媒介とした王十朋賞揚が、朱子学の根拠地である福建という地域に起こるからである。

朱熹と王十朋の直接的な接点は、朱熹の文章中に二つを求めることができる。一つは『梅溪集』の序文、もう一つは王十朋宛ての書簡である。前者の王十朋『梅溪集』序文は、劉珙（字共甫、建寧府崇安人）の代わりに、朱熹が撰じたものである。その文頭では、君子と小人の特徴を論じ、君子の例として、諸葛亮・杜甫・顔真卿・韓愈・范仲淹の五名を挙げた後、今人では王十朋こそがその君子に該当すると賞賛する。

此五君子、其所遭不同、所立亦異、然其心則皆所謂光明正大、疎暢洞達、磊磊落落、而不可揜者也。其見於功業文章、下至字畫之微、蓋可以望之而得其為人。求之今人、則於太子詹事王公龜齡、其亦庶幾乎此者矣。

此の五君子、其の遭ふ所同じからず、立つ所も亦た異なり、然るに其の心は則ち皆所謂光明正大、疎暢洞達、磊磊落落にして、揜ふべからざる者なり。其れ功業を文章に見し、あは下は字畫の微に至るまで、蓋し之を望むを以て其の人と為りを得べけん。之を今人に

求むれば、則ち太子詹事王公龜齡に於て、其れ亦た此に庶幾ちかき者ならんか。

(朱熹「宋梅溪王忠文公文集序」、『晦庵先生朱文公文集』 卷七十五)

後者は、朱熹が三十八歳の時(乾道三年「一一六七」)に、王十朋に寄せた書簡である。⁽¹⁶⁾

當是時、聽於士大夫之論、聽於輿人走卒之言、下至於閭閻市里、女婦兒童之聚、亦莫不曰天下之望、今有王公也。已而得其爲進士時所奉大對讀之、已而得其在館閣時上奏事讀之、已而得其爲柱史、在臺諫、遷侍郎時所論諫事讀之、已而又得其爲故大丞相魏國公之誄文及楚東酬唱等詩讀之、觀其立言措意、上自奏對陳說、下逮燕笑從容、蓋無一言一字不出於天理人倫之大、而世俗所謂利害得喪、榮辱死生之變、一無所入於其中、讀之真能使入胸中浩然、鄙吝消落、誠不意克頑廉懦立之效、乃於吾身見之。

是の時に當り、士大夫の論を聴き、輿人走卒の言を聴くに、下は閭閻市里、女婦兒童の聚に至るまで、亦た天下の望と曰はざる莫きは、今王公有るなり。已に其の進士と爲る時に奉じる所の大對を得て之を読み、已に其の館閣に在る時の上奏事を得て之を読み、已に其の柱史爲る、台諫に在る、侍郎に遷る時に論じる所の諫事を得て之を読み、已に又其の故大丞相魏國公の爲の誄文及び楚東酬唱等の詩を得て之を読み、其の立言措意を観れば、上は奏對陳說自り、下は燕笑從容に逮ぶまで、蓋し一言一字として天理人倫の大に出でざるは無く、世俗の所謂利害得喪、榮辱死生の變、一として其の中に入る所無し、之を読まば真に能く人をして胸中浩然、鄙吝消落せしめ、誠に自ら意せずして頑廉懦立の效を克くす、乃ち吾身に於て之を見ず。

(朱熹「王龜齡」、『晦庵先生朱文公文集』 卷三十七)

朱熹はここで、「天下の望」が王十朋の一身にあるという常套の褒辞のみならず、王十朋の著作を逐一列挙し、しかもその全てを拝読したと述べた上で、その文章には「頑廉懦立」の力があると讃える。いづれも王十朋自身にかかる文章における褒辞であるから、額面通りに受け取ることではできないが、特に後者の書簡において、科擧の答案や張浚の誄文、楚東唱酬詩が挙げられる点は、本稿が考察した「王状元」への評価と合致するものである。

さらに、忌憚のない意見表明という点においても、朱熹は王十朋を評価すべき人物として捉えていた。

王龜齡學也粗疏。只是他天姿高、意思誠懇、表裏如一、所至州郡上下皆風動、而今難得此等人。

王龜齡の学は粗疏たり。只だ是れ他の天姿高く、意思誠懇にして、表裏一の如く、至る所は州郡上下、皆風動す、而今此の等の人得

難きなり。

(朱子語類 卷百三十二)

朱熹は、王十朋の学問は粗忽であると断じつつも、本来備わっている人格が高く、生真面目で裏表のない性格のために、結局は州民を感化させ得るのであると言つ。ここでは、その感化の対象を「州郡上下」と言つように、朱熹が王十朋の地方官としての資質を高く評価していることが分かる。

こうした朱熹の評価を媒介として、その後の福建人士の文章に、王十朋賞揚が見られるようになる。

慶元中、某竊第來歸、郷之儒先楊君明遠出一編曰『南遊集』以示某曰、「此永嘉詹事王公之所作也。」某時尚少、未悉公行事本末、然嘗誦晦庵先生所爲『梅溪集序』、則已知公爲一代正人矣。及得此編、益加鄉慕、宦游二十載、率齋以自隨、若「謙邑宰」與「中和」「安靜堂」等詩、口之熟焉。嘉定丁丑、蒙恩假守、獲繼公躅於四十七年之後。邦人父老語及公者、必感激涕零、堯夫牧兒亦知有所謂王侍郎也。

慶元中、某竊かに第く來歸す、郷の儒先楊君明遠一編『南遊集』と曰ふを出して以て某に示して曰く、「此れ永嘉の詹事王公の作す所なり」と。某時に尚ほ少し、未だ公の行事本末を悉にせず、然るに嘗て晦庵先生為す所の『梅溪集序』を誦す、則ち已に公の二代の正人爲るを知る。此の編を得るに及び、益郷慕を加ふ、宦游二十載、率齋^{（おのづか）}して以て自隨す、「謙邑宰」と「中和」「安靜堂」等詩の如きは、口の焉を熟せるなり。嘉定丁丑（一二二七）、恩を蒙り守を仮り、公の躅を四十七年の後に繼ぐを獲る。邦人父老語りて公に及ぶ者は、必ず感激涕零す、堯夫牧兒も亦た所謂王侍郎有るを知るなり。

(真徳秀「跋梅溪統集」、西山先生真文忠公文集 卷三十四)

真徳秀（一二七八～一二三五、字景元、号西山、建寧府浦城人）は、中央官界において朱子学の政治理念の確立に努めた朱子学者であるが、嘉定十年（丁丑、一二二七）、知泉州事在任中に王十朋の『梅溪統集』を刊行し、跋を寄せている。ここで真徳秀が語る王十朋受容には、二つの側面を認めることができる。一つは、朱熹の『梅溪集』序を通して王十朋を知っていた、つまり朱熹を媒介として王十朋という人物を認識していることであり、もう一つは、「公の躅を四十七年の後に繼ぐ」と言つように、知泉州事の先任者として敬意を払っていることである。

王十朋は張浚失脚（符離の敗戦）に連座する形で饒州に転じた後、夔州、湖州の知事を歴任し、泉州に至っているのだが、泉州のように偉大なる先任者として王十朋を賞揚する評価は、他の州に多くは見られない、福建独自のも

のである。朱熹・黄榦に師事し、真徳秀とも親しく交わった陳宓（一一七一～一二三〇、字師復、号復齋、興化莆田人）は、王十朋の事跡を、中央官界での功績と泉州での善政を対にして賞賛する。

先生之道、得天之全。氣剛以和、如四時然。功在王室、惠留於泉。

先生の道、天の全きを得たり。氣剛にして以て和し、四時の如く然り。功は王室に在り、恵は泉に留む。

〔「贊梅溪王先生像」、復齋先生龍岡陳公文集 卷八〕

あるいは、真徳秀に師事した王邁（一一八五～一二四八、字実之、号臞軒、福州仙遊人）もまた、知泉州事として善政を敷いた「二千石の良」として、王十朋の名を挙げる。

後五十載何人、稱二千石之良。惟梅溪之王公、與吾州之倪老。¹⁸⁾

後の五十載何人が、二千石の良を称さん。惟だ梅溪の王公と、吾州の倪老とあるのみ。

〔黄侍郎再知泉州啓、臞軒集 卷八〕

さらに、真徳秀に師事した劉克莊（一一八七～一二六九、字潜夫、号後村、莆田人）に至ると、王十朋と真徳秀を、泉州に赴任した先賢として併称するようになる。

先賢遠矣、清如梅溪、仁如西山、非閣下其誰。

先賢遠からんや、清は梅溪の如く、仁は西山の如きは、閣下に非ざれば其れ誰ならん。

〔「与泉守吳刑部書」、後村先生大全集 卷百三十二〕

附言すれば、王邁や劉克莊の王十朋評価は第三者へ宛てた書函におけるものであり、その評価にある程度の客観性が確立していなければ成立しないものである。ここには、朱子学が継承・発展する過程で、王十朋の泉州赴任に高い評価が与えられ、定着していく様相が確認できる。「王状元」に与えられた評価について、王状元本が刊行された福建という地域に着目したとき、まず王十朋が泉州に赴任して善政を敷いたという事実があり、そしてその泉州を中心に朱子学が普及した際に、朱熹の王十朋評価を、真徳秀を中心とする福建人士が継承することにより、知泉州の偉大なる前任者という評価が形成されたという図式を看取することができる。「王状元」が書名の冠辞として採用された背景に、この福建独自の王十朋評価が強く影響していると考えられるのである。

七 まとめ

以上、王十朋と王状元本注釈者の関係から、「王状元」が有する付加価値、王十朋評価について考察を加えた。総括すれば、「王状元」が表す王十朋評価は、三層の構造から成っていると見えよう。最も下の基層は、「状元」そのものに対する評価、科挙システムの中での成功者、そして縁者にとつての中央とのパイプ役という評価である。

第二層は、王十朋その人の状元登第における経歴を踏まえた評価である。状元登第を果たす以前の王十朋は、名族の一員ではなく、家塾の教師という下積み新时期を経て成功した人物であり、科挙での成功の典例例という評価が与えられよう。加えて、その状元登第の背景には、秦檜専制崩壊後の革新の気運があり、それに乗じた張浚に認められることで、反秦檜、对金朝積極派の一員としての評価も与えられたのである。

そして第三層は、王状元本が刊行された福建という地域に限定的な王十朋評価である。泉州こそは、王十朋が最後の官職を奉じた場所であり、また最初期の朱子学が地域の名族たちによつて普及していった場所である。この地において、朱熹に高く評価され、実際に泉州に赴任した先賢という評価が「王状元」に加えられたと考えられる。

現代の我々にとつては、ただの書誌情報に過ぎない「王状元集注」という冠辞は、それが出現した南宋当時、とりわけ福建においては、蓋しかくの如く絶大な価値を有していたのである。

ただし、こうした冠辞は、純粹に商業的喧伝を目的としたものであったのだろうか。「集百家注」という体裁に見える百という数と、第四節で触れた、王十朋が家塾で教えた門弟の人数（百二十八）が近いことや、初期の朱子学普及が名族の子弟教育によつてなされたことから鑑みるに、家塾の存在・役割を考慮せずに、これらの冠辞を安直に商業出版の所産とするのは、軽率であるように思われる。この問題は、家塾教育にとつて、科挙登第のみが最終目標であったのかという問題と強く関連する。川上恭司氏が論じるように、南宋士人社会においては学問そのものが社会的価値を有するようになっており、「王状元」の冠辞によつて期待された喧伝の対象とは、書物のみならず、こうした書物を編集・刊行し得る、家塾という教育機構をも含んでいたのだと考えるべきであろう。

(付記) 本稿は、二〇〇八年五月十日佐賀大学開催の九州中国学会大会での口頭発表をもとに、新たな調査・検討を加え、まとめたものである。司会の高津孝先生をはじめ、当日助言を賜った方々に深く御礼申し上げます。

注

- (1) 金文京『南戯中的婚変故事和南宋状元文化』(『中華戯曲』第二十七輯、山西師範大学戯曲文物研究所、二〇〇二年)。
- (2) 西野貞治『東坡詩王状元集注本について』(『人文研究』第十五卷第六号、大阪市立大学文学部、一九六四年)は、王状元本における先行注釈書の剽窃を指摘した上で、編集者王十朋の仮託説を唱える。劉尚栄『百家注分類東坡詩集』考(『蘇軾著作版本論叢』巴蜀書社、一九八八年)及び王友勝『關於蘇詩歷史接受的幾箇問題』(『文学評論』人民文学出版社、二〇〇二年第六期)は、両者ともに王十朋自身の編集を主張するものの、最終的な編集・刊行が別人の手によるものであることを認めている。つまり、編集者王十朋の真偽に拘わらず、王十朋の名を書名に冠したことに喧伝性が認められ、もって王十朋の同時代評価の一端とすることが可能なのである。
- (3) 最も古いとされる版は、建安黄善善夫家塾本であり、その後宋元を通じて、建安魏仲卿家塾本、建安万卷堂家塾本、建安虞平齋務本書堂刊本が刊行され、他にも金刻本、廬陵坊刻本が現存する。
- (4) 李貞慧『百家注分類東坡詩』評価之再商榷——以王文誥注家分類説為中心的討論(『台大文史哲学報』第六十三期、台湾大学文学院、二〇〇五年)。ただし李貞慧氏の論考は、その人物が注釈者として挙名される妥当性について論じた部分と、王十朋との交友者が注釈者に多いことを、王十朋編集者肯定説の裏付けとして用いる部分で構成されており、本稿の、同時代の王十朋評価を考察するという姿勢とは角度を異にするものである。
- (5) 参考までに概数を記せば、先行注釈書「十注本」の注釈者十名を除いた八十六名のうち、三十名ほどが江西詩派を含む蘇軾・黄庭堅の縁者であり、五十五名前後が本稿で扱った南宋期の注釈者である。李貞慧氏の指摘にもあるが、そのうち、王十朋との交流以外はほとんど事跡が明らかでない人物は、三十七名を数える。
- (6) 秦檜専制については寺地遵『南宋初期政治史研究』(溪水社、一九八八年)及び沈松勤『南宋文人与党争』(北京

人民出版社、二〇〇五年）を参照。反対者への弾劾による追放、言論弾圧が秦檜専制の特色とされている。

- (7) 『宋史』卷三百八十七、王十朋伝に「秦檜久塞言路、至是十朋與馮方・胡憲・查籥・李浩相繼論事、太學生爲五賢詩述其事」とある。

- (8) 拙稿「王十朋編『楚東唱酬集』について——南宋初期の政治状況と関連して——」（『中国文学論集』第三十六号、九州大学中国文学会、二〇〇七年）を参照。

- (9) 以下、王十朋の詩文及びその巻次は『王十朋全集』（梅溪集重刊委員会編、上海古籍出版社、一九九八年、引用時は『全集』と略称）に拠り、四部叢刊本・四庫全書本を適宜参照した。

- (10) 「仲舒」は、唐德宗朝で礼部侍郎にあり、論著を善くした李紆を指すか。『旧唐書』卷百三十七、李紆伝。

- (11) 『史記』司馬相如伝の「文君夜亡奔相如、相如乃與馳歸成都、家居徒四壁立」を踏まえる。

- (12) ここでの「書会」が家塾の類を指すことは、前掲金文京論文に考証がある。

- (13) この「困窮から状元登第」という成功像は、例えば戯曲「荆釵記」の主人公である王十朋像にも反映されている。題の「荆釵」は、貧困なため結納の品が贈れない王十朋が、結婚相手の錢玉蓮に贈った苦心の品物を指す。

- (14) 「廣文先生」は官学の教授を指す。杜甫「醉時歌」（『杜詩詳註』卷三）の「廣文先生官獨冷」を踏まえる。

- (15) 小島毅「福建南部の名族と朱子学の普及」（『宋代の知識人』、宋代史研究会研究報告第四集、汲古書院、一九九三年）。

- (16) 書簡の編年は、陳来「朱子書信編年考証」（増訂本、三聯書店、二〇〇七年）に依った。

- (17) 「頑廉懦立」は、『孟子』万章下の「故聞伯夷之風者、頑夫廉、懦夫有立志」を踏まえる。

- (18) 「荊州之倪老」は倪思（字正甫、湖州歸安人）を指す。嘉泰元年（一一〇一）に知泉州事となる。

- (19) 川上恭司「科挙と宋代社会——その下第士人問題——」（『待兼山論叢史学篇』第二十一号、大阪大学文学部、一九八七年）。